

心の探求 途方もない文章で

古井由吉さんを悼む

詩人・作家 松浦寿輝（寄稿）

古井由吉さんが亡くなつた。

何しろ途方もない文章の書き

手だった。

日本語という言語の

に

突然

ぱつかりと

巨大な空白

が広がつてしまつたように感じ

る。

この空白はもう何によつて

も、誰によつても埋められない

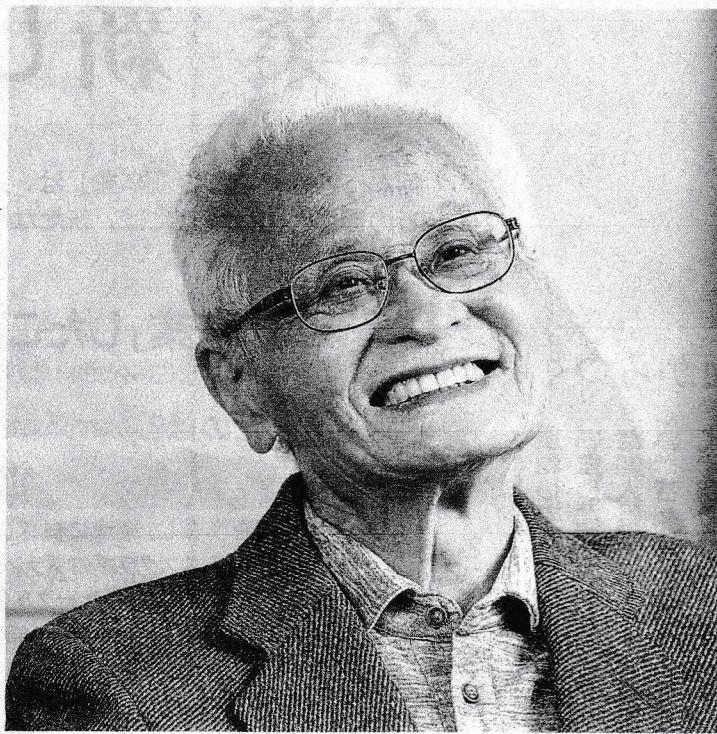
のではなかつた。

悲哀と

いうよりむしろ恐怖に近い感情

がそくそくと込み上げてくる。

鉱脈に眠つていた美、氣韻、雅趣、風合い、優しさ、激しさ、荒々しさ、そうしたすべてを細心な手つきで掘り出してきて、精妙に組み合わせ、堅固に結晶させ、比類のない言葉の音楽、言葉の彫刻をつくりあげてみせ



「反小説」の試み 「言葉の藝術」を創造

そんな独創的な文体によつて
彼が行なつたのは、要するに、
人の心の探求である。心の探求
— 拍子抜けするほど平凡な言
い草と聞こえるかもしない。
しかしすべての偉大な文学がや
つて来たのは、つまるところそ
れである。ただ、古井さんが探
求した心の世界は、なまじつか
の「心理小説」が扱う領域をは
るかに越え、身体の深層と、ま
た歳月の経過と精妙に共振しな
がら絶えず変化しつづける、謎
と逆説に満ちた広大な時空だつ
た。それはほとんど一つの宇宙
の世代」などという単純なレッ
テルに收まりきるようなもので
はなかつたのは言うまでもな
い。

ある時期以降、古井さんは
「小説」という文学形式そのも
のから徐々に離脱し、物語とも
エッセイとも散文詩ともつかな
い前代未聞の「言葉の藝術」の
創造へと向かつていった。一
見、変哲もない私小説のように
見えながら、それは高度に前衛

た人だった。

古井さんに初めてお目にかか
つたのは二十数年前、ある雑誌
が企画した対談でのことだつ
た。怖い文豪に気圧されること
になるかと緊張しつつ、恐る恐
る出かけていったところ、穏や
かな聲音で諄々と話してくださ
るのに安堵した。しかしその安
堵でついこっちの気が弛んで、
間抜けなことをぽろりと洩らす
と、とたんに古井さんの目がぎ
らりと光つて、こっちの覚悟を
試すかのような強いまなざしで
覗きこんでくるのにはたじろい
だものだ。

的な「反小説」の試みだった。
その果敢な冒險の意味と価値を
解明し尽くした批評や研究は、
未だに出現していない。

古井さんに初めてお目にかか
つたのは二十数年前、ある雑誌
が企画した対談でのことだつ
た。怖い文豪に気圧されること
になるかと緊張しつつ、恐る恐
る出かけていったところ、穏や
かな聲音で諄々と話してくださ
るのに安堵した。しかしその安
堵でついこっちの気が弛んで、
間抜けなことをぽろりと洩らす
と、とたんに古井さんの目がぎ
らりと光つて、こっちの覚悟を
試すかのような強いまなざしで
覗きこんでくるのにはたじろい
だものだ。

もうお目にかかるないかと思
うと悲しくてたまらない。古井
さん、どうかゆっくりとお休み
ください。

射程は古代・夢・あの世まで

作家・島田雅彦さんの話

三十七年の長きに渡り、私淑
し、文学的影響を受けてきました。
た。酒席で呟く言葉さえ眞界か
らのメッセージのようで、すぐ
に理解できず、後からその深
い意味に気づくという不思議な
体験を何度もしました。自身
の病や日常の体験、戦争の記
見えたながら、それは高度に前衛

憶に根ざしつつ、肉体や意識
に起きた異変を敏感に捉え、
「私」の変容を冷徹に観察して
いらっしゃました。その文学的射程
は、中世や古代、夢、あの世ま
で含んだとてつもなく広いもの
で、世界文学の最前線を切り開
いたといつても過言ではありません。

古井由吉（ふるい・よしきよ）さん。2月
18日、肝細胞がんで死去した。82歳だった